平成 27 年度研究チーム中間報告（第 2 回目）

国家を超えた女性の移動と国民国家、国家間関係の変容

NO.131 研究幹事：安武留美（文学部）

平成 28 年度は初めてチームのメンバー全員での研究会が実現し、各メンバーの研究内容についての理解を深めることができた。

６月 24 日の午後、甲南大学においてチームのメンバー全員（Judy Tzu-Chung Wu, Karen Leong, Brian M. Hayashi, 小西幸男、安武留美）が集合して研究会を開催した。まず、Wu 教授と Leong 教授とは初対面となる本学の小西教授が、イスラム教徒の難民の受け入れを巡る EU 加盟国内での最近の法的言説をジェンダーの視点から分析する発表を行った。その後、安武、Hayashi 、Wu 、Leong の順に、各研究の進展状況および課題論文の方向性について発表を行った。研究会に同席された Leong 教授の共同研究者であるアリゾナ州立大学アメリカインディアン研究学科教授 Myla Vicent Carpio 氏からも、貴重なコメントをもらうことができた。

また、本チームの研究成果還元のために、上記研究会当日２限めの文学部英語英米文学科の授業において、Leong 教授が共同研究者 Carpio 教授と共に「第二次世界大戦中の日系人の強制収容とアメリカインディアンの土地」と題して講演された。これまで、白人対マイノリティという構図で白人至上主義的なアメリカ史の再検討が進んできたが、最近“Settler Colonialism(定住植民地主義)”という新しい概念を用いて、これまでマイノリティの立場あった人々（例えばアジア系アメリカ人）と先住民との関係を見直そうとする研究が盛んとなりつつある。広くアメリカの小中学校の教科書に掲載されるようになった第二次世界大戦中の日系アメリカ人の強制収容の歴史は、日系人を白人至上主義の犠牲者として描いてきたが、先住民の視点から見るとどのようなことが見えてくるのだろうか。講演は、収容所建設のために居留地の土地の提供を強要されたヒラ川およびコロラ川地域の先住民と、その地域に建設された収容所に強制収容された日系人との関係に関するもので、アメリカ社会の複雑な一面を垣間見せてくれるものであった。文学部 2 回生を中心とする１００余名の学生および数名の教員が参加し、歴史的な負の遺産を掘り起こすことの意義についても考える機会を持った。

翌日の 6 月 25 日には、京都大学人文科学研究所においてハヤシ教授の大学院生を中心とするシンポジウムにチーム全員が参加した。Leong、Caripo 両教授が難度を上げて同様のテーマについて発表され、Wu 教授はアメリカ最初の有色人女性連邦議会議員となったハワイ選出の日系人下院議員 Patsy Mink Takemoto の活動とその意義についての発表を行なわれた。その後京都大学の院生２名が各自の研究について発表し、ヂスカッションが行われた。

6 月 27 日には奈良まで足を伸ばして東大寺、春日大社、頭塔を見学し、悠久の昔から広範囲に行われてきた国家を超えた人の移動と国家・国家関係の変容を実感した。Leong 教授、Wu

教授の短期間の日本訪問の機会を利用して交流の機会を持てたのは、チームにとって大変有意義であった。